

坂内ミツ先生をお偲びして

大熊 米子



(在りし日の坂内先生)

ふだんでも、半年も一年も、お目にかからない事が多い此頃だったのに、つい先日お目にかかって、あんなに、いろいろお話し下さった先生が、もう幽明境を異にしていらっしやる……思い出というには、余りに新しい先生が、私の胸の中に、未だ任んでいて下さるのに、「悲しい」も「淋しい」も、未だひしとは感じられない儘に、こおろぎの鳴きすだく此の夜更けに、その日の事を、又しても思っている。……

「先生のお伴をして、何だか、幼稚園の敷地を探していたら、白い木の柵のある、広い広い牧場のような所が、見つかった。どうしてだか、私は、其処が、二〇万坪あるのだと判っていて、先生にそれ

を申し上げた。すると、溝の向う側にある木柵を、私は越えられなくて、首をのぼしてのぞいてだけいるのに、先生は、いつのまにか、ススーと中に入って、どんどん歩いていらっしやる。雨だか、草の露に、しとど濡れている感じが、未だ足に残っている。……」私は、数日前に見た夢のお話を、先生に申上げた。先生は、それを、本当に、本当にお嬉しそうに、うなずかれた。「ホッホッホ、二〇万坪ね」……一寸間をおいて、大和郷の頃は、保育だけに打ち込めた、一番いい時でしたよ」……そして又暫くしてポツリと「未だ死ねませんね」と明るい声で仰有るのだった。「ええ、先生、中休みでございますわ」私も、のどかに伝えた。「中休みねえ……ずい分働きましたからねえ」しばらく先生は、楽しい事を夢見るように、微笑をたたえつつづけていらした。

先生は、いつも前進を考えておいでになる方だった。これといいとは、決してお気をゆるめられない方だった。此の日、先生は、おつむりの中に、どんな新しい幼稚園の構想をされたのだろうか、今にして思えば、先生は、極楽で開園される幼稚園の敷地を探していらっしやった様にしか思えない。……なくなられる、ほんの十日前の

事だった。

「私はね、一生『園』という字には縁があるんですよ、入院する日まで幼稚園にいて、此処に來たら、又園でしょう。大抵病院は院がつくの……」武蔵野療園に居られた時のお言葉だった。其後、清川病院に移られてからも、すぐ近くが杉並幼稚園だったので、私は意識的に、どなたに道をお教える時も、杉並幼稚園のすぐそばです」とつけ加えた。本当に、園に生き、園を愛された方だった。そして、園長の現職のまま逝かれた事は、私共にとって、せめてもの慰めであり、又、お励ましである。最後にお目にかかった時、私はもう一つ忘れられない事があった。私が此の頃、お手伝いに行っている幼稚園の事をお訊ね下さったので、私は、結婚前には、幼稚園の生活が全部であったのに、家庭を持つと、身も心もかけ持ちで、良心にとがめて……それが悩みですと申し上げた。すると先生は、おからだを大きく動かされて、そうですか？ それは私は違うと思いますよ、家庭や子供を持てば、持っただけの幅が出るから、前より悪いという事はありませんよ、そりゃあ、辛いけれど……」と、私をじっと見つめながら仰言のだった。熱のこもった、真剣な語調でいらしたので、私は先生の御病状を思い出して、之はいけないと思つて、急いで、此のお話を切り上げたのだったが、先生は、四十数年を、立派に、家庭と幼稚園を両立させて來られたのだった。之は、非凡な事だったと思う、本当に謙虚な、よい奥様であられた。歴史画家でいらした御夫君が、帝展に出品されて、発表の頃など、心配され、喜ばれ、又或時は、素直に嘆かれたご様子が、今も目に浮ぶようである。又いつもお忙しいおからだであられ乍ら、ち

やんと四人のお子様をしっかりと握つて、それぞれ方向の違われるお子様の進路を、的確に導かれた先生こそ、本当によいお母様であられた。立派なお母様であられたからこそ、そして、申し分のない奥様でいらしたからこそ、御家庭の生活が、幼稚園生活にプラスになられたのだと思う。そして、妻としても母としても未だ未だの私は、先生の此の最後のお教えを、私の最後の日迄、真剣に勉強して行かなければならない事だと、深く感じて居る。

——先生の六七日の夜記——

高問 富子

幼児教育のために、尊い心魂を擡げて、坂内先生は、昭和三十一年八月九日、六十九歳の生涯を、静かに終わられました。

生前の、先生に接しながら、強く印象されますことは、先生の高深な御仁徳であり、円満なお人からでありまして、その御人格にふさわしい、教育理念に徹したお姿であります。

昭和四年四月、当時の東京女子高等師範学校附属幼稚園の教職を勇退されました先生は、大和郷幼稚園に創始者として赴任されました。東京市教育局長藤井利蒼先生が園長、坂内先生は主任保母、加えて、保育実習科を卒業したばかりの私と三名の職員で、五十余名の園児を迎えて、開園式をいたしました。当時の大和郷は、若槻礼次郎氏をはじめ、高位高官の人々が、ずらりと軒をならべ、世にいわゆる知識人、文化人の集りでありました。園長先生は公職にありましたので殆んどお見えにならず、むずかしい、大和郷の理事さん

方の中にあつて、進歩的な教育観を樹立し、幼児教育を理解させ、これをおし進めていらした先生の御苦労、御努力は、血みどろ、そのものでありました。いま尚、私が先生から受け継いで、生活の信条にしていますことは、『熱をもって仕事にあたれ。』積極的な人間であれ。『人の言に素直に服せ』であります。またその反面先生の人間味は、あふれるような、あたたかさで人を包み、本当に人のためにはその労をいとわず、何処までも出向かれて、お世話をしていらつしました。堅実な御人格は、どこまでも、相手の人に貫き通さずにおかない熱意と努力を、傾げつくす方でありました。また世間ばなしなどもよくされて、涙をこぼしては、お話を楽しんだものでした。御趣味は、能狂言がお好きのように存じています。ついで、先頃まで、遠く福島の方へ、一カ月に何回か御出張になつて、保育者のための教鞭をとつていらつしやることを伺いました時、先生の御健康をあんじて、御無理のないようにと申し上げましたら、先生は、私の三男が早く他界しましたので、社会に何ら奉仕することができませんでした。こどもの分を、私が報いてやりたいと、一生懸命、老軀ながらつとめています。』

この、お言葉をきいて、親心の尊さ、あたたかさと人の心の真にふれたような気がして、私も血のたぎりを覚えて、神仏に手を合わせました。秋分の日、いまは亡き先生のお姿を、いく冊かのアルバムにおしのびしながら、このような先生の高潔な、あたたかい心構えを、私の胸に蘇らせて、全生涯を幼児教育のために、捧げつくされた崇高な態度に合掌して、先生のお教えをうけた一人として、更に、この道に精進しなければならぬと、心に期したものであります。

おちば
村井トミ

(晩秋の雑木林にて)

…風も吹かない

だあれもない

かざりと木の葉が

おちてきた

しずかに下りて

土の上

そうっと見上げて

うつむいて

おとなにだまって

すわってる

…風が吹く

木の葉が散る

くるくるさわいで

まわってく

高く低く

流されて

遠くちりぢり

別れてく

一人旅で

淋しそう

「おとなに」はおとなしくの意